

山の動く日きたる、かく云へど、人これを信ぜじ

(詩碑)

山の動く日

山の動く日きたる、

かく云へど、人これを信ぜじ。

山はしばらく眠りしのみ、

その昔、彼等みな火に燃えて動きしを。

されど、そは信ぜずともよし、

人よ、ああ、唯だこれを信ぜよ、

すべて眠りし女、

今ぞ目覚めて動くなる。

詩

意

晶子が長い間待ち望んでいた多くの女性たちの目覚めを火山にたとえている。今まで眠っていた女性たちが今ようやく動きだしました。きっと女性たちは自立し動き始めるでしょう。

掲載歌集 『夏より秋へ』 大正3(1914)年1月

初出 「青鞥」創刊号 明治44(1911)年9月

「そぞろごと」の題で発表(晶子33歳)

